

〔貞要集三〕生花之事附爐風爐炭置様の事

一炭は胴炭相手炭置合、十文字、切手木同様に置候を、長くらべとて嫌之、其外如何様にも作意次第、竪長に初炭は多ク置て、湯早ク沸候様に置なし候事、第一後の炭には、半駄底取、長火ばし取添底取申候、是には品々仕形在之候、功者仕なしを可見效、後の炭は輕ク置形を面白キやうに置申事肝要也、書面に記がたし、後の炭過て、其儘座敷へ出る事に成申候、炭を輕ク面白置なしたるが能候也、後の炭には心持有事也、

一風爐の炭は、胴炭を置、輪炭、割炭置、前より火移を見て能様に置申候、横長ク炭置不申候へば品無之候、勿論去り嫌ひも無之、玄かれ共當世は、風爐にても炭見申事に成申候、故置形も見立能置申候、爐風爐共に炭は置にくき物なり、能々稽古鍛鍊可有事、

炭所望

〔草人木上〕一名殘炭を客に所望する事あり、常の炭に殊外かはりて、同中にも別而きれいなるをたしなみていだすべし、あたらしき木具のあし付に紙を敷て、すみをくみて出すべし、茶湯功者の客か、又は貴高の御客など茶湯にすかせ給は、申べし、さしてもあらぬ儀ならば所望すべからず、

一客に炭のぞむ時は、釜を上ざるさきに炭入計を持って出、炭所望の由を云べし、若客の炭をくに極りたらば、客亭主に向て御釜上給へといふ、其時亭主釜を上、いつもの所にくはんをぬきてをき、座を去てそこ取ほうろく取出して客に進べし、其時客亭主座に居かはりて、つまの風にてほこりのた、ぬやうに居てもろ手をつき、先釜を見、其次に炭入を見、其次に爐中を見て、さのみ灰つかへずば、そこを取べからず、いまださのみなれ過ずば、卒爾に火をわりくたき、又は火をせ、りくづすべからず、なだれか、りたる火をかばいて炭をすれば、猶面白物也、  
一そこをとる時は、ぬりぶち、あたらしき栗ぶちにても、ふところよりはな紙を取出し、ふちの内